

いちごのアザミウマ類による被害発生に注意しましょう！

いちご施設に発生するアザミウマ類（写真1）は、主に春先に多発生し、果実表面を加害することでサビ状の被害が生じ、商品価値を低下させます（写真2）。近年、秋期の多発事例が増加しています。さらに、秋期の防除が不十分であった場合、ハウス内で越冬したアザミウマ類が春先の早い時期から加害することで、被害の拡大が懸念されます。

アザミウマ類は花粉を好むため、開花後から発生が増加します。そのため、特に10月中に収穫が始まる早い作型の施設では、早い時期から多発し易く（図1）、年末にかけて大きな被害が生じるおそれがあります。



写真1 花に寄生するヒラアザミウマ



写真2 未成熟果のアザミウマ被害（瘦果間の褐変）

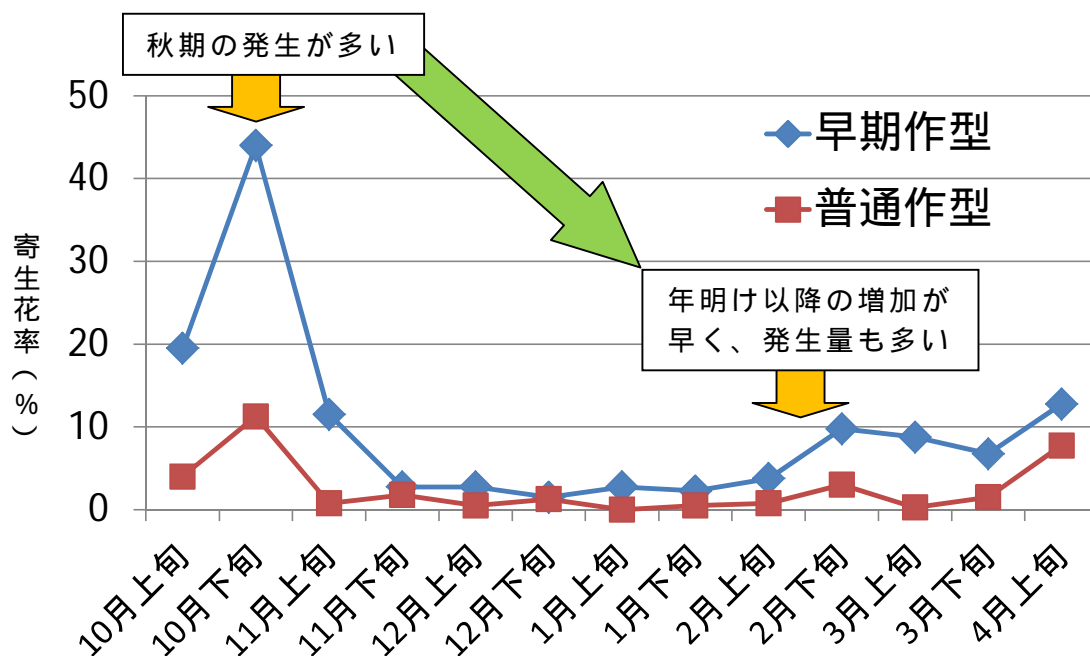


図1 アザミウマ類のいちご早期作型（10月収穫開始）と普通作型（11月収穫開始）における発生推移

それぞれ4ほ場ごとの平均値

【防除対策】

- ・11月中まで施設外からアザミウマ類の侵入は続きます。管理作業時に、花にいるアザミウマ類や、未成熟果の褐変被害状況を観察し、早期発見・早期防除を心掛けましょう。
- ・秋にアザミウマ類が多発した施設では、翌年早い時期から発生し易いため、特に注意が必要です（図1）。
- ・薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避けましょう。
- ・天敵やミツバチへの影響が小さく殺幼虫効果のあるIGR（脱皮阻害）剤と、成虫にも効果が高い速効性の薬剤を、発生状況に応じて使い分けましょう。
- ・多発生時には、IGR剤散布から5日程度開けてスピノエース顆粒水和剤などを散布すると、高い防除効果が期待できます（宮城県農業園芸総合研究所参考資料より）。
- ・施設内の端の畦は薬剤散布ムラが生じ易く、防除後も再発生し易いので注意しましょう。

【備考】

- ・県内のいちご施設では、主にヒラズハナアザミウマが発生しています。
- ・農業環境指導センターホームページに「園芸作物で発生したアザミウマ類の薬剤感受性検定結果」および「同（続報）」を掲載中です。
- ・ハダニ類の天敵カブリダニ類を使用する場合、アザミウマ類などの病虫害防除は天敵導入前に済ませ、天敵に影響の少ない薬剤を選択しましょう。なお詳細につきましては、最寄りの農業振興事務所または農業環境指導センターまでお問い合わせ下さい。

表1 いちごのアザミウマ類に有効な主要薬剤(平成24年9月10日現在)

薬剤名	使用倍率	使用時期 (収穫前日数)	使用回数	ミツバチ 影響 日数
発生初期に有効な薬剤				
IGR（脱皮阻害）剤				
カウンター乳剤	2000倍	前日まで	4回以内	1日
マッチ乳剤*	1000～2000倍	前日まで	4回以内	1日
カスケード乳剤*	4000倍	前日まで	3回以内	1日
アタプロン乳剤*	2000倍	前日まで	3回以内	1日
多発生時や仕上げ防除に有効な薬剤				
スピノシン系				
スピノエース顆粒水和剤	5000倍	前日まで	2回以内	3日
ディアナSC	2500～5000倍	前日まで	2回以内	3日
合成ピレスロイド系				
アーデント水和剤*	1000倍	前日まで	4回以内	2日

* 一部薬剤の農薬登録はいちごのミカンキイロアザミウマ。

詳しくは、農業環境指導センター（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>）までお問合せ下さい。

また、当センター携帯サイト（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>）もご利用下さい。

（ 0 2 8 - 6 2 6 - 3 0 8 6 ）